

道徳の時間で活用する ～生命の尊さ～

長門市立向陽小学校 木村 康子

1 本場面におけるポイント

● 写真や言葉から主題への関心を高める

主題にかかわる写真や言葉などを見ながら考えることで、本時で取り上げる価値への関心を高める。

● 道徳的価値への自覚を促す

ねらいとする価値への自覚を深めるために、話し合いをする中心的な資料として取り上げる。

2 授業の実際

1 主題名（単元名・題材名） 命あるものを大切に

資料（「私たちの道徳」P96～P99）

2 ねらい

ヒキガエルに石を投げたときのアドルフとピエールたちの気持ちと手から石を落とし何も言わずに立っているときの気持ちを比べ、なぜ気持ちが変わったのかを考えさせることにより、命あるものを大切にしようとする心情を育てる。

3 展開

（1）導入 資料の価値への方向付けをする

教師：みなさんは命が大切だということはよく知っています。では、命あるものを大切にするととはどういうことですか？

A児：生き物を大切にする。命は一つしかないから・・・。

B児：動物を大事にする。かわいがる。

教師：虫やカエルでも？

□ 指導上の留意点・支援・「私たちの道徳」活用のポイント等

「命は一つしかない」「命は大切だ」ということは、様々な場面で何度も聞かされよく知っている。しかし、日頃、虫などの生き物や植物に対する様子を見ると、どのくらい理解しているのだろうかと感じることがある。「命あるものを大切にするととは？」という問いに、指示しなくても「私たちの道徳」関連ページ（P90～P94）を読みながら考えている児童もいた。



(2) 展開 資料「ヒキガエルとロバ」読んで話し合う

教師：アドルフやピエールたちは、どうしてヒキガエルに石を投げたのですか。どんな気持ち？

A児：ヒキガエルは気持ち悪いから。ぬるぬるしているし、模様も気持ち悪いし。

B児：面白そうだし。暇だったから何となく。

C児：そうそう。いたずらしたくなかったから。

D児：ヒキガエルだし、別にいいかなと思って。

教師：ヒキガエルにだから、石ぐらい投げてもいいと思っているのですね。でも最後はアドルフの手から石が静かにすべり落ちましたね。どうして気持ちが変わったのかを中心に考えていきましょう。



□ 指導上の留意点・支援・「私たちの道徳」活用のポイント等

初めは、ヒキガエルの命なんて何とも思っていない、むしろカエルが困ることを面白がっている、ロバにひかれそうになるのを楽しんでいるところをしっかりとおさえた。その後、ロバが立ち止まった場面、石が手からすべり落ちていった場面について話し合った。

(3) 終末 ワークシートに振り返りを書かせる

教師：今日の学習でどんなことを学びましたか。命あるものを大切にすることは、どんなことだと思いますか。

(以下：ワークシートの記述)

A児：動物たちにも命はあるし、他の虫たちも大切にしないといけない。

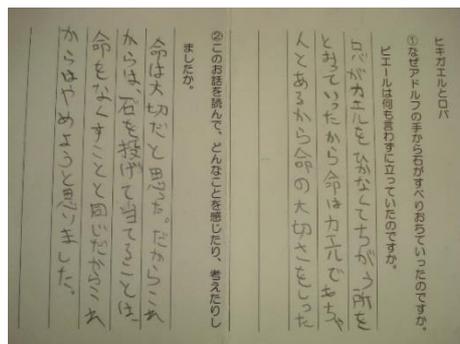
B児：生き物には全部に命があるので、ロバのように優しくしたい。

C児：気持ち悪くても命があるから、命を大切にしていきたいなと思った。石を投げたり、生き物が嫌がったりすることをしたらいけない。

D児：命があるものは最後まで育てた方がいい。

□ 指導上の留意点・支援・「私たちの道徳」活用のポイント等

資料をもとに十分に話し合ったあとで、一人ずつが自分の考えを書く時間を設けた。資料の最後の場面について考えた後、本時全体の振り返りをした。資料から離れて自分の生活に向かわせたいと考えたからだが、石を投げないということから離れられない児童もいた。振り返りのもち方については再考する必要がある。



3 実践を振り返って

児童はアドルフやピエールの立場にたって、素直に自然に考えることができていた。資料の初めの段階の道徳的価値観が児童と似ていたからだと思う。児童の実態と近い資料を選ぶことの大切さを改めて感じた。また、価値の捉え方について児童は「命は大事にしなければいけない。」ということをよく知っている。本時の学習を通して新たに学ばせることは何か、それに向かわせるための発問を吟味することが必要だということを確認できた。この学習をした後、わずかな変化ではあるが、教室にいる虫をたたかずに、そっと逃がす姿が見られるようになった。